

視察概要書

1 視察日時 令和7年10月28日（火）
午後1時30分～午後3時30分

2 視察先 小野市議会
（住所：兵庫県小野市中島町
531番地）



3 調査事項 夢と希望の教育について

4 視察先概要

（1）挨拶 小野市市議会 議長 平田 真美 氏

（2）説明者 小野市教育委員会 教育指導部長 藤井 潤 氏
小野市教育委員会 教育指導部 学校教育課 末瀬 由希子 氏

（3）視察先概要：兵庫県小野市

ア 人口： 46,616人（令和5年9月1日現在）

イ 面積： 92.94km²



▲平田議長 ご挨拶



▲大和委員長 挨拶

5 調査項目

- (1) 「夢と希望の教育」について概要について
- (2) 「夢と希望の教育」導入した背景・経緯について
- (3) 教育方針に市民や保護者、学校関係者の意見はどのように取り入れたのか
- (4) 「夢と希望の教育」が、児童生徒の学習意欲や学力向上にどのような影響を与えているのか。また、成果の測定や学力以外の面についても評価しているのか。
- (5) 小中一貫教育のカリキュラムや学習指導における従来の小中学校との違いについて
- (6) 小中一貫教育における教員配置や学校間の連携について
- (7) 教員の理解や意識改革、スキルアップの進め方について
- (8) 教員の負担軽減のために工夫している点について
- (9) 16か年教育における福祉分門等の市長部局との連携について
- (10) 今後、さらに発展させたい新しい取組や展望について

6 視察の目的

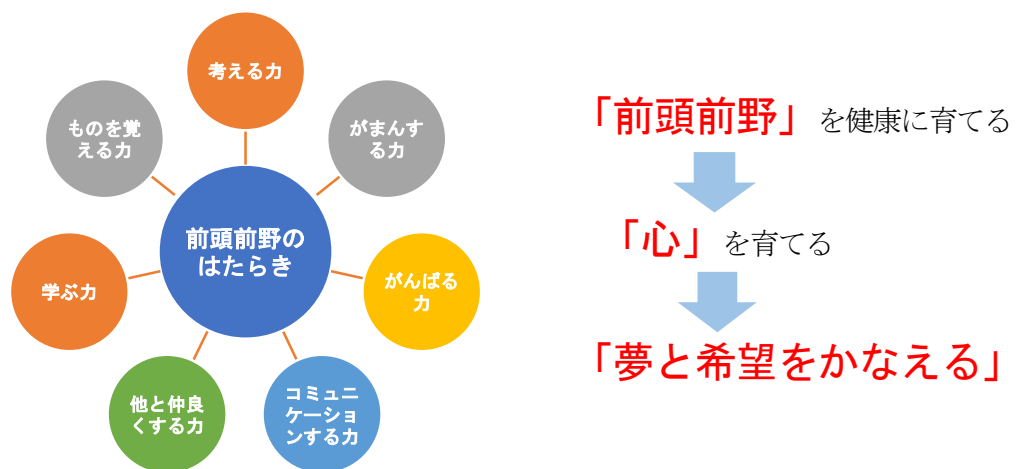
「国際社会の中で、たくましく活躍できる心豊かで自立した人づくり」を基本理念に、少子高齢化、人口減少社会、グローバル化など急激な社会情勢の変化の中で未来を切り開く原動力は「人づくり」、すなわち「教育」が重要であるとの観点から、東北大学教授の川島隆太教授の「脳科学に基づく教育」に取り組んでおり、基礎学力の育成を進めるための「おの検定」や「小中一貫教育」、「16か年教育」など、市独自の様々な取組を行っている。子どもたち一人一人の可能性を引き出し、未来を切り開く力を育む大変意義深い取組であることから、小野市の取組みを調査・研究するもの。

7 施策等の概要（現状や事業効果）

脳科学に基づく教育について

東北大学教授の川島隆太氏が平成17年10月、小野市教育行政顧問に就任。脳の司令塔である前頭前野を鍛えることが確かな学力、豊かな心、健やかな体を育むと提唱。

- ・前頭前野のはたらき →やる気・行動を調整する力、感情のコントロール
- ・前頭前野を鍛える方法 →読み・書き・計算、音読、コミュニケーション
- ・前頭前野が成長する時期→3歳までと10歳から「10歳の飛躍」



⇒脳科学の理論に基づき、「おの検定」、「16か年教育」、「小中一貫教育」を3本柱に取り組みを始める。

おの検定について

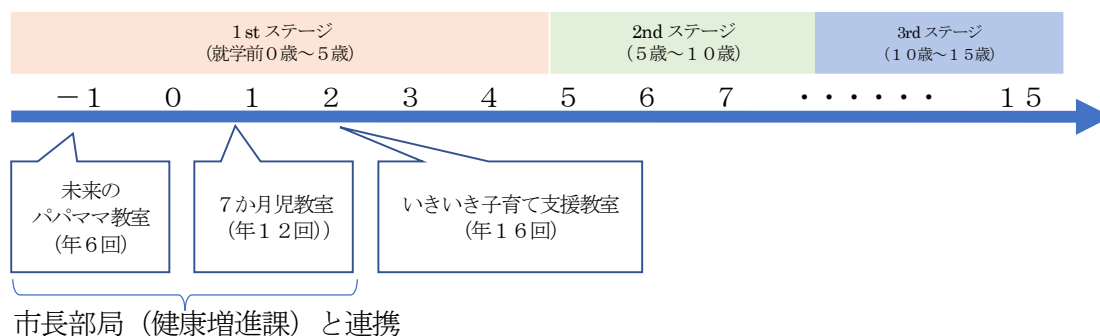
「おの検定」は、小中学校統一の独自検定であり、基礎学力・体力の育成、家庭学習の習慣化、朝食の推進、「やればできる」というチャレンジ精神の育成を目的として導入された。小・中学校とも「おの漢字検定」「おの計算検定」「おの体力検定」の3種類あり、中学校においては、「おの英語検定」もある。

児童生徒は、教職員が中心となって作成する「おの検定テキスト」を活用し学習を行う。テキストは低・中・高で1冊ずつ、教科プラスアルファではなく、教科書に準じて作成されており、教科書に沿ってテキストも学習すると「おの検定」だけでなく、普通のテストの勉強にもつながるものである。

各学校において、小学校は小学校で年3回、中学校で年4回、おの検定を実施し、市教育委員会の事務員が採点等を行っている。おの検定の合格ラインは80点であるが、何度でも再チャレンジすることができる。間違いが多い問題などは、「間違いランキング集」などを作成し、各学校へフィードバックすることで、基礎学力の定着を図っている。

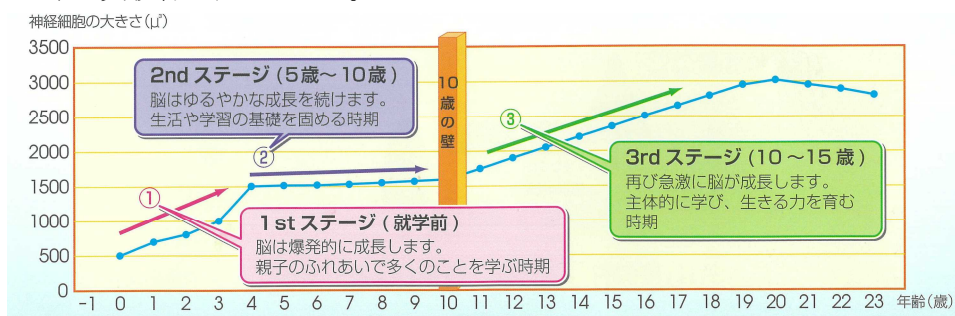
16か年教育について

母親のおなかに「いのち」が宿るー1歳から義務教育終了（15歳）までの16か年を、脳の発達にとって重要な時期ととらえ、キャリア形成を意識し、脳の成長に応じた脳科学の見解に基づく子育ての啓発を市長部局と連携し平成17年度から開始している。



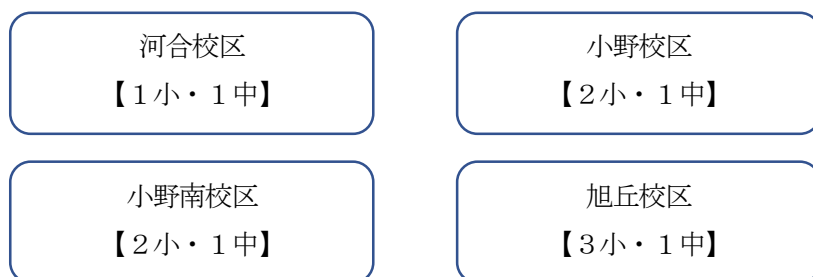
小中一貫教育について

平成16年から小中連携教育を開始しており、平成28年からは市内全校区小中一貫教育となった。前頭前野は、生まれてから4～5歳まで大きく成長する。その後、10歳くらいで少し停滞するが、思春期を迎えて10歳を超えたころから大人に向けて、さらに脳は成長するので、小学校高学年から中学校までの大人の脳へ成長する期間のつながりを大切にするため、小中一貫教育を行っている。

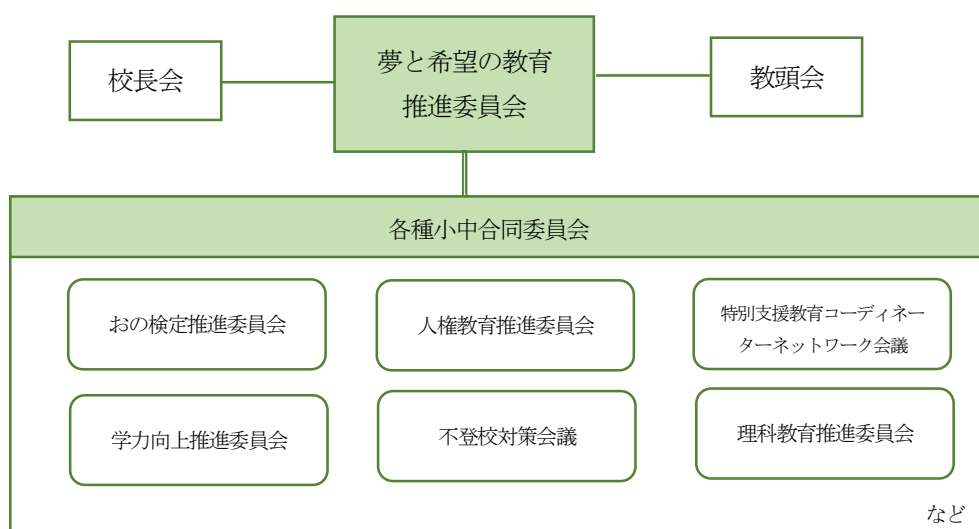


(おの「16か年教育」パンフレットから抜粋)

9か年の学びのつながりを大切にした教育を行い、中学校1年を7年生、2年生を8年生、3年生を9年生とし、脳の発達時期と学習内容の高度化に対応している。学校によって、小中で行事（遠足など）を一緒にしたり、中学校の授業に小学校が参加したりというような取組も行っている。また、小学校高学年では、学力向上と自立に向けた社会性の育成を目的として、教科担任制を導入している。



小中一貫教育を推進するため、担当校長、教頭、各校教員代表1名から組織する「夢と希望の教育推進委員会」を設置している。校長会、教頭会と横並びの立ち位置である組織で、その時々的小野市の教育、課題を話し合っている。



教育委員会の改革

- ・教育委員会の学校定例訪問の廃止
- ・市の研究指定の廃止
- ・教員の定例教育講演会の廃止
- ・卒業式の告示の廃止
- ・夢と希望の教育推進委員会の設置
- ・学校独自の研究活動のための自由裁量予算の設定
- ・冊子「小野市の教育」をリーフレット「夢と希望の教育」に変更

8 主な質疑応答

Q 1 読みたい本を探すところから読書活動が始まり、1冊を手にして開いて読んでいくところに教育効果があると考え。便利さが優先されて読書活動の時間が横に置かれ、現在図書室の利用頻度、開設時間が減っている現状があるが、小野市では各学校における読書活動の支援対策として、一定の図書費などを配当されているのか。

A 1 小野市でも読書活動は課題となっており、取組みは行っているが読書は伸びていない現状がある。本の予算は潤沢ではなく、優先順位を付けたときに、本が一番になりにくいところがあり、悩んでいるところであるが、小野市の市立図書館には、学校から本のリクエストを図書館にすると、学校に配達してくれるシステムがある。そのような仕組みで補っている部分はあるが、小野市でも読書活動は今後の課題であると考えている。

Q 2 おの検定について、不登校だったり、病気で受けられなかったりする子に対する対応はどのように行っているのか。

A 2 検定という言葉がきちとしたものという印象を持たれると思うが、柔軟に扱っており、欠席がいても別日を設けていつでも受検ができ、何回も再チャレンジができるようになっている。不登校の子には別室受検も可能であり、学級づくりの一助として活用されている。

Q 3 不登校についてはどのような状況か。

A 3 不登校の子を扱っていた適応教室を校内サポートルームという名前で各学校の中に設置し、支援員を配置して一旦休憩する場所を学校の中に作るなど、社会的自立を目指したような不登校体制みたいなものに取り組み始めたところ、コロナ禍中にふえて課題だった不登校数は、現在は減少傾向にある。

Q 4 16か年教育の中で、未来のパパママ教室の案内などはどのように行っているのか。

A 4 未来のパパママ教室や7か月児教室は健康増進課が行っている事業で、そこに教育委員会が時間を拝借して相乗りしているだけで、案内や人数の集約等は元課が行っている。20年間継続しているので、自然とその時間が設けられている形である。

Q 5 小中一貫教育の中で、1小1中の学校とその他の学校で学力に違いはあるのか。

A 5 1小1中の河合小中は5・4制をとっており、そのほかの学校はすべて6・4制をとっているが、学力に大きな差はない。

Q 6 小中一貫校における課題は連携にあると思うが、小野市の小中一貫教育において、連携の課題等はどのように解決しているのか。

A 6 先生の顔の見える関係づくりを大事にしている。何かあったときは一緒に考えられる関係づくりを重要視していて、小・中で一緒に集まって研究授業をしたりとか、生徒指導上の問題を話し合ったりとかしている。頻繁に小・中が一緒になって取組事を20年間続けているので、先生同士皆さん仲が良く、小・中でお互いの顔が分かる、そういう関係づくりを大事にしているのが、小野市の小・中一貫教育の重要なところである。

Q 7 小・中の校長先生同士の学校運営に対する方針が一致すれば連携がうまく考えるが、連携をとるために、定期的に校長同士などが顔を合わせて話し合う連絡協議会みたいなものが持たれているのか。

A 7 管理職、授業づくり部会、地域づくり部会など、定期的に会議は持たれている。また、学期に2回程度、小中で交流週間というのを行っており、小学校の先生がいつでも中学校の授業を見に行っていっていい週間が作られている。また、その逆の週間もあり、授業の様子をいつでも見に行ける期間をつくり、常に交流するようにしている。



▲視察中の様子



▲おの検定テキスト

9 委員の所感

●小野市の教育施策を視察し、基礎学力の定着を図る「おの検定や、小中一貫教育、16か年教育といった一貫性のある教育システムが、市全体で子どもの成長を長期的に支える仕組みとして機能していることが印象に残った。特に、学力の基礎を確実に定着させる仕組みと、発達段階に応じた自立や社会性の育成を組み合わせた教育設計は、生徒一人ひとりの「学び」と「育ち」を総合的に支える先進的なモデルであると感じた。

また、脳科学などの科学的知見を教育政策に取り入れ、発達段階に応じた指導を行うことで、単に知識を習得するだけでなく、自己肯定感や思考力、問題解決力の育成にもつながっている点が印象的だった。小中一貫教育や地域との連携を通じて、学校だけでなく地域全体で子どもを見守る体制が整っており、行政施策としての持続性や実効性の高さを実感した。今回の視察を通じ、教育施策においては、学力向上のみならず、子どもの自立や社会性、創造力の育成まで視野に入れた総合的な支援が重要であることを改めて認識した。今後、中間市における教育施策の充実や地域連携の強化に向けて、大いに参考になる視察となった。

●小野市教育委員会では、東北大学川島教授と長年にわたる連携と協力のもと脳科学と教育の関係性を重視した教育を推進されている。脳科学と教育の関連性において、重視すべきは「脳の司令塔、前頭前野を鍛えること」との説明を受けた。前頭前野を鍛えるには、スマホの利用時間がマイナス要因として作用することが付加された。「おの夢と希望の教育」を、市全体で受け入れ、支えて、支援を続けること、これを長期間にわたり継続・実践されている。教育行政に対する市民の信頼性の高さを伺い知ることができる。

今、ICT教育全盛のように思えるが、小野市ではアナログの大切さを基本に据え、確かな学力の定着のため「おの検定」実施し、徹底して鍛える方法がとられている。読み、書き、計算、音読、スピード計算の徹底がそれである。このおの検定の問題用紙の作成、採点、結果の報告、再チャレンジ等の作業にかかる業務の一切を学校現場や教職員に負担をかけず、教育委員会が予算化して実施している。小野市教育委員会が求める「おの夢と希望の教育」は、「教育の不易と流行」の流行（例：ICT教育、タブレットの活用等）に流されることなく、いつ何時でも社会の求めに適応できる学習の基礎を、しっかりと身に付けさせることの必要性を学ぶことができた。この2日間の行政視察を通して、各自治体

が子どもたちへの「教育的投資」を継続実施することの重要性を感じるものであった。

●東北大学の川島教授を顧問に迎え、脳科学の見地にもとづき、妊娠時から中学卒業までの16か年教育に取り組まれている。教育委員会は自立して未来を拓く人づくりを目指し、市長部局との連携により、7か月教室、パパママ教室、幼稚園、保育園へ出張講演など、脳科学に基づく子育て支援を行っている。福祉と教育の融合は、理想的で、取り入れるべきであると思った。市長、教育長の、教育への深い理解、人づくりへの熱い思いが、小野市独自の教育システムの構築をもたらしていると感じた。自主研修ができるよう、各学校に自由に使える予算を配分し、教員のモチベーション向上にも努めていた。開始当初の子どもが20歳を迎え、自分の目標を語ってくれたと話す、教育委員会の職員は、誇らしげであった。

●小野市では、脳科学の分野において前頭前野を活性化させることにより、心が育ち情緒が安定するという取組が教育の分野で活用されていた。「おの検定」では教員が教科書に沿った手作りのテキストを作成して、子どもたちが共同してモチベーションを高め合いながら、みんなで切磋琢磨できるような検定をしていることが興味深い取組であった。本市においても、子どもたちと教員の一体感を持てる教育を進める必要性を強く感じた。

●小野市では、「夢と希望の教育」という理念のもと、「脳を鍛え夢と希望をかなえる学び」を独自の教育政策で行っていた。教育政策の中にある「おの検定」では、基礎学力の育成を目的とした独自のテストを実施するに当たり、クラスの仲間と助け合いながら協調性を高める環境作りにもなっていると思った。

「小中一貫教育」は、9年間を通して子どもたちの成長を見守る仕組みが整っており、市、教育委員会と先生方の連携もスムーズだった。小野市のように「まち全体で子どもを育てる」姿勢は、今後の取組の参考になると感じた。



▲小野市議会議場にて